

耕さんのこと

古山 登

耕治人さんが、舌ガンで、一月六日の早朝亡くなった。享年八十一歳。

喪主たるべき夫人のよし子さんは入院中で、通夜も告別式も行わず、翌日の七日に耕

さんの自宅（野方）に近い、落合火葬場に近親者だけが集まって野辺送りを済ませたとしよう。

通夜も告別式も行わないというのは近頃珍らしいことではないが、耕さんの場合、あらゆる面で地味だった故人だっただけに、いかにも耕さんらしいと云えなくもないが、もし、あのよし子夫人が元氣だったらと思うと、無残な思いの方が強かった。

耕さんに、私が初めて会ったのは昭和二十五年の四月だったから、もう三十七、八年も昔のことになる。

この年三月学校を卒業して、『改造』編集

部に就職した私は、老練の文芸担当の先輩が引責辞職して他誌に転勤してしまったため、いきなり文芸欄を担当することになってしまったのだ。

そこで、以前から一度会ってみたいと思っていた井伏鱒二さんを先ず訪ね、次に、荻窪の井伏さん宅から程近い阿佐ヶ谷の上林晧さんを訪れた。上林さんは、改造社での大先輩に当たっていた。

上林さんは、初対面にもかかわらず、先輩らしい心遣いで文壇や文芸ジャーナリズムのことをあれこれ話してくれたが、その話の中で耕さんのことが出た。いい仕事をしているのだが、どうも余り注文がないようだ。それでも、発表誌の当てもないまま、こつこつ書きつけている、当今貴重な作家だ、そんな風な話であった。

翌日、私は耕さんを訪ねることにした。その頃の野方辺りは、まだ空地や畑のいっぱい残っている田園で、木造平屋建ての耕さんの家が一軒、ぼつんとその中に建っていた。

耕さんは、その頃、主に、「指紋」（『文学界』昭24・八月号）に代表される、戦時中特高警察に共産主義者と誤認されて逮捕され、拷問に耐えた経験を素材にした作品を書いていたので、私は何となく闘士的な風貌を予想していたが、実際はまるで違っていて、朴訥そのままといった人柄であった。いくぶん吃りがちで口下手なので会話はしばしば途切れ、何とも居心地の悪い初対面であった。

後で聞き知ったところでは、耕治人という作家は、極端な交際下手、世渡り下手で、近所つきあいをはじめ、何から何まで奥さんのよし子さんが取りしきって居り、奥さんとい

う名マナージャーなしでは、耕治人は生きて生けないのではないかと云われる程不器用な人物、ということであった。

事実、メ切り前に、手土産持参で、「主人は徹夜で書き上げ、そのまま寝てしまいましたので、私が代りにお届けに上りました」と云って改造社に原稿を届けに見えたよし子夫人に会って、私は、先輩たちの耕治人評に合点が行ったものだった。

その原稿は、四十枚ばかりの「暴力」といふ、共産主義者誤認ものの一連の作品で『改造』昭和二十五年六月号に掲載されて好評だったが、発売直後、やはり手土産持参でよし子夫人がお礼に見えられたのには面くらった。

耕よし子さんは、戦前は『主婦之友』の編集部に勤め、同僚でもあり先輩社員でもあった治人氏と結婚、治人氏が投獄されてずいぶん辛い思いをしたが、戦後は、鎌倉文庫が倒産する迄、同社の『婦人文庫』の編集部に勤め、『主婦之友』での経験を生かして、家庭記事を担当した。

鎌倉文庫といえ、敗戦直前に、久米正雄、川端康成、高見順、小林秀雄など、いわゆる『鎌倉文士』がそれぞれの蔵書を持ち寄って

開いた貸本屋が、戦後、出版社に変身したのだが、正に飛ぶ鳥を落とす勢いで、社員の給与も群を抜いてよかったから、よし子さんも生活の心配することなく、治人さんに文筆一本に打ち込ませることができた。

しかし、文士の商法で、鎌倉文庫は僅か三年余であっけなく倒産、文筆一本に打ち込みながら売れ行きのあまりよくない治人さんと収入の道を失ったよし子さん夫婦は、たちまち生活に窮することになった。

そこで、よし子さんは、『主婦之友』『婦人文庫』で身に着けた、お茶とお華の知識を生かして、茶道と生花の出張教授をすることにした。

はじめはなかなかお弟子もできなかったが、やがて、気さくで親切で面倒見のいいよし子さんの人格と安い謝礼が人伝に評判になり、治人さんが世事には一切関りなく安心して文筆一本の生活を送れるだけの収入を得ることもできるようになった。

耕さんも、相変わらず地味ながら、読売文学賞(昭44「一条の光」)第一回平林いた子文学賞(昭48「この世に招かれて来た客」)芸術選奨・文部大臣賞(昭55『耕治人全詩集』)と、長年の文学修業がようやく報われる形と

なった。

その蔭に、糟糠の妻としてのよし子夫人の内助の功があったことは云うまでもない。やうと、苦勞しつづけたこの夫婦に曙光が射そうとしていた。

ところが、思わぬ所に落し穴があった。よし子さんにボケ症状が見られるようになったのだ。家事はおろか生活的には殆ど不能者に近い老いた夫と、長年の労苦がボケという悲惨な形で報いられた老妻二人だけの家内は目茶苦茶になり、思いもかけぬ事件が次々に起った。

どうしようもない思いでその様を眺めていた小説家・耕治人は、そのことを作品化した。

一昨年発表された「天井から降る哀しい音」である。この作品は「老人文学の真骨頂」と高く評価され、その後も僅かずながら幾度も増刷された。

そして、一人家に居て、次から次へと銀行に払い込まれてくる印税の使い道を知らず、途方に暮れたまま作者の耕さんは世を去り、モデルになったよし子さんは、そんなことは全く知らぬまま、病室に居る。